ASD グレーゾーン学生が認知する 小集団活動の困難さとそのサポート要求

○原田知佳¹・土屋耕治²

(¹名城大学人間学部, ²南山大学人文学部)

キーワード: Autism Spectrum Disorder, グレーゾーン, 小集団

ASD gray-zone students perceive Difficulty of small group activities and their support requirements

Chika HARADA¹ & Koji TSUCHIYA²

(¹ Faculty of Human Studies, Meijo Univ., ² Faculty of Humanities, Nanzan Univ.)

Key Words: Social Sensitivity, Consensus Building, Self-Regulation

目 的

現在, 教育現場では, 発達障害の診断は受けていないものの, その境界にいる子どもや, 通常学級に在籍する発達障害の疑いのある子どもなど, グレーゾーンと呼ばれる児童・生徒への支援に悩む教員が増えている (矢野他, 2015)。グレーゾーン者の支援は, 小学校・中学校・高校に限らず, 大学においても必要とされる。発達障害については多様な知見が蓄積されつつあるが, とりわけグレーゾーン者の集団内での振る舞いや, グレーゾーン者が集団の中で活躍するための環境づくりに資するアプローチについては未だ検討の余地が残されている。実際, 教育現場ではグループワークや小集団になって共同作業を行うことも多いが, そうした場での支援に繋がる知見は少ない。そこで, 本研究では, 自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder; ASD) グレーゾーン者の小集団活動に注目し, 彼らが感じている困難さとそのサポート要求について検討する。具体的には, 小集団で合意形成課題を解いてもらった後に, そこで感じた困難さや, どういったサポートやルールがあると良いと思ったかを直接尋ね, ASD 傾向の高低によって小集団活動で感じる困難さやサポート要求が異なるかどうかを検討する。

方 法

参加者 大学1年生240名 (女性149名, 男性91名)

手続き 参加者は6人×40グループの小集団に分かれ, 合意形成課題に回答した。その後, 質問紙調査を行った。

合意形成課題 「生きがい」に関する世論調査 (中央調査報, 2010) を題材に, 20歳以上の日本人が「生きがいを感じている」と答えた6つの生きがい内容について, 多くの人が選択したと思われるものから順に順位付けをしてもらった。課題は, (1) 個人で順位付けするフェイズ (10分), (2) 集団で合意形成を行うフェイズ (40分), (3) 質問紙の回答を行うフェイズ, の3つのフェイズで構成されていた。

Table 1 RME得点が予測する小集団活動の困難さ認知

困難な点	度数	Odd ratio	R ²
〈RME低群に特徴的な回答〉			
発言しにくい	15	0.87*	.06 [†]
他者の意見を受け入れられない	5	0.75**	.23**
自分の意見を過剰に主張してしまう	2	0.87**	.06
他者の意見に同調してしまう	2	0.81*	.14
〈RME高群に特徴的な回答〉			
自分の意見を分かりやすく伝えること	54	1.11*	.04*
他者の意見を理解すること	6	1.28**	.17 [†]
〈RME得点が予測できなかった回答〉			
コンセンサスを図ること	164	1.02	.00
メンバー間の発言量の差	11	1.10	.03

** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

質問紙 (1) 小集団活動時の困難さ認知: 「話し合いの過程においてどういう部分に難しさや困難さを感じましたか」と尋ね, 自由記述で回答を求めた。(2) 小集団活動時のサポート要求: 「(1)で上げた難しさや困難さを少しでも軽減するために, メンバーあるいは第三者から, どのような声かけやサポートがあると良いと思いますか。また, どういった話し合いのルールや約束があるとよいと思いますか。」と尋ね, 自由記述で回答を求めた。

(3) ASD 傾向 (36枚, 選択肢各4つ): 目の領域の写真を見て, ターゲットの感情について評定させる Reading the Mind in the Eyes Test アジア版 (RME; Adams et al., 2009; 吉川左紀子氏・野村光江氏により作成) を用いた。

結果および考察

小集団活動時の困難さ認知, および, サポート要求の自由記述回答それぞれについて, KJ法に基づき, 前者は8つ, 後者は7つに分類した (Table 1, 2)。ロジスティック回帰分析を実施するため, 各分類内容に合致する回答がある場合は「0」, ない場合は「1」と値を割り当て, RME得点が困難さ認知の内容を予測するかどうかを検討した。RME得点が低いほど回答が増える傾向にあるものは, 「発言のしにくさ」「他者の意見を受け入れられない」「過剰な主張」「他者への同調」といった内容であった。一方, RME得点が高いほど回答が増える傾向にあるものは, 「自分の意見の他者伝達」「他者意見の理解」であった。

サポート要求についても同様の手続きを踏み, ロジスティック回帰分析を実施したが, いずれも RME 得点が予測できるサポート内容はなかった。そこで, RME 平均値 (25.89) ± 1SD で RME 低群 39 名, 高群 34 名に分類した上で, Fisher の直接確率検定を行った。分析の結果, RME 低群に特徴的な回答として「相手の意見を否定しないというルール」の導入要求があることが確認された ($p < .05$)。本研究のデータでは, 自分のためにして欲しいサポートと, グループのためにあると良いサポートの弁別ができないため, 今後はこの点を弁別できるデータを収集した上で検討をする必要があるだろう。

Table 2 RME得点低群・高群別のサポート要求

導入してほしいルールやサポート	低群	高群	全体度数
一人一回発言するというルール	12	13	57
第三者による介入	8	9	51
自分の意見をしっかり発言するというルール	4	6	27
相手の意見を否定しないというルール	5 [†]	0 [†]	26
他者の話を聞くというルール	0	1	16
メンバーからのサポート			
(発言できないメンバーへの声かけ, 頷きなど)	5	1	14
役割分担 (司会役の決定など)	7	1	12